法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

〈書評と紹介〉石河康国著『櫛田民蔵 : マルクス探求の生涯』

榎, 一江 / ENOKI, Kazue

(出版者 / Publisher)
法政大学大原社会問題研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌
(巻 / Volume)
779・780
(開始ページ / Start Page)
107
(終了ページ / End Page)
110
(発行年 / Year)
2023-10

石河康国著

『櫛田民蔵
——マルクス探求の生涯』

紹介者：榎　一江

本書は，大原社会問題研究所創立期のメンバーであった櫛田民蔵（1885-1934）の評伝である。近年，同じく研究員であった森戸辰男の評伝が小池聖一によって上梓されたが（『森戸辰男』吉川弘文館，2021年），本書は「日本におけるマルクス経済学の開拓者」（9頁）としての櫛田民蔵に迫る。著者はすでに山川均，向坂逸郎の評伝を上梓しており，「実力がありかつ文献が遺されているわりには照明があたらない人物」（228頁）として櫛田を選んだという。

今，再びマルクスが注目され，わかりやすい本が多くの人々に求められているが，およそ100年前にマルクスと格闘した櫛田の論稿はそれほど易しくない。正直に言えば，大原社会問題研究所の100年史を編さんした紹介者もなぜこれほど櫛田の評価が高いのか解せないでいたが，著者は「櫛田民蔵が人をひきつけたのは，その人生である」（11頁）と言う。本書は，原典と格闘して「殉職」した櫛田の論稿に残されたマルクス探求の道筋をその生涯とともに読み解く。以下，12の章と「櫛田民蔵年譜」を含む本書の概要を紹介しよう。

第1章「彷徨せる若者」は，1885年に福島県石城郡上小川村（現いわき市小川町）で生まれた櫛田民蔵が，父の反対を押し切って外国語の勉強を志し，苦学した時代を描く。櫛田が，磐城中学校から東北学院を経て1901年に慶応義塾内の三田英語学校を前身とする錦城中学に転入し，東京外語学校，京都帝大に進学して再び東京に落ち着くまでの時期である。1905年に東京外国語学校に進学してドイツ語を専攻した櫛田は，高野岩三郎の経済原論の教室で権田保之助と出会い，新思潮に触れていく。東京帝大に進んだ権田に対し，櫛田は京都帝大に進学し，河上肇に師事する。とはいえ，大学院への進学を勧める河上に対し，東京への思いを断ちがたかった櫛田は，1912年に再上京した。

第2章「社会政策のゆりかごの中で」は，東京帝大大学院時代である。とはいえ，1912年に上京した櫛田が河上の紹介状を手に最初に訪ねたのは東京商大の福田徳三であり，福田の紹介で高野を訪ね，東京帝大の高野研究室に籍を置くようになる。9月に大学院への入学が許可され，10月には高野の経済統計研究室助手に内定し，無給で資料整理など事務作業に従事したがこれにより授業料が相殺されたようである。研究に邁進するかにみえた櫛田だが，1914年2月に結婚したものの，3週間で別居し，6月に離婚した。また，1916年には高野岩三郎の姪に求婚し，河上や福田を巻き込む騒動に発展した。結局，1917年9月に東京外語大時代の恩師山口小太郎の娘フキ（19歳）と婚約したが，櫛田は1917年4月に「大阪朝日」に入社し，東京を離れることになった。

第3章「古典派経済学とマルクス経済学」は，論説記者として入社した「大阪朝日」時代と，わずか1年で退職して籍を移した同志社時代を描く。関西で2年間弱を過ごした櫛田は東京に戻るのだが，この間多くの論説を残した。著者によれば，「『新しき村』的世界に心残りながらマルクスにほれこんだ河上と，古典派経済

学とマルクスの区別と関連を探求中の櫛田が，師弟で同じような問題意識を議論しながらマルクスに接近していく時期」（67頁）であったという。

第4章「『共産党宣言』と唯物史観に着目」は，1919年に東京に戻った櫛田が，東京帝大法学部から独立して新設された経済学部で高野研究室に出入りし，「同人会」メンバーとして「マルクス主義を極めていく過程」を描く。その成果は，1920年に「『共産党宣言』の研究」としてまとめられたが，すぐには刊行されず，大内兵衛らの手によって1970年に青木書店から刊行された。

第5章「河上肇の胸を借りて」は，「唯物史観と階級闘争説および正統派経済学との関係――河上肇著『近世経済思想史論』批評」『著作評論』（1920年7月号）を発表し，河上肇を批判的に論評しはじめた時期を描く。著者は，同論文が「櫛田が河上の胸を借りて飛躍し，いわば師弟関係が逆転しはじめたことを示す画期的なもの」（87頁）であったと紹介する。折しも森戸事件により，高野ら「同人会」メンバーが東大を去り，大原社会問題研究所に移った頃である。1919年9月に経済学部講師となっていた櫛田も1920年3月に辞職し，8月には大原社会問題研究所の研究員に就任した。そしてまもなく，ドイツに派遣され，文献収集の任に当たることになったのである。

第6章「唯物史観に沈潜」は，1922年に帰国した櫛田が兵庫県武庫郡（現，西宮）に居を構えて大原社会問題研究所研究員として研究に専念した時期である。唯物史観探求を再開した櫛田は，1923年8月に刊行された『大原社会問題研究所雑誌』創刊号に，「唯物史観の公式における『生産』および『生産方法』」を発表し，マルクスの「経済学批判序説」を取り上げた。この続編として，同誌に「ケネーの経済表と唯物史観の交渉」（1924年4月号）を著し，「マルクス経済学の基礎を固めた」とされる。

第7章「河上肇を越えて」は，『改造』（1924年7月号）に「社会主義は闇に面するか光に面するか――河上博士著『資本主義経済学の史的発展』に関する一感想」を寄稿し，本格的な河上批判により論壇で脚光を浴びるようになった時期である。翌年には，「マルクスの価値概念にかんする一考察――河上博士の『価値人類犠牲説』にたいする若干の疑問」『大原社会問題研究所雑誌』（1925年1月号）を発表し，河上批判を通して，櫛田は価値論争に参画していった。

第8章「マルクス派の分化のなかで」は，唯物史観から価値論に探求の軸足を移しつつ，「無産階級と世界恐慌」『我等』（1924年1月～5月号）を発表するなど広く社会問題についても活発に議論し，数々の翻訳も発表していた櫛田が，1925年に東京への転居を申し出，同人社を拠点に再び東京で活動し始めた時期である。論壇に登場した福本和夫との論戦を経て，「福本イズムの洗礼をトラウマにして，日本共産党の運動に参加し」ていく河上との距離が開いていく。改造社版に対抗して，五社連盟版（希望閣，同人社，弘文堂，叢文閣，岩波書店）『マルクス・エンゲルス全集』の刊行で「統一戦線」を組んだ河上と櫛田であったが，この頓挫後，共同作業はなくなった。

第9章「価値論争」は，小泉信三「労働価値説と平均利潤率の問題」『改造』1922年2月号を発火点とする日本経済学史上の大論争を取り上げる。まず，山川均が批判を加え，次第に櫛田―河上―小泉の三つ巴の論争となったが，小泉との応酬が終わると，新たな論敵として土方成美，高田保馬が登場し，焦点は地代論に進んでいく。この価値論争の到達点として，櫛田の「商品価値の批判序説」『社会問題講座』（1927年6月）が紹介される。

第10章「河上肇との緊張と別れ」は，「一九二七年～二八年にかけて，無産政党運動や労働運動が活性化し，マルクス主義陣営もいわゆる労農派と講座派への分化がはじまり，櫛田もそれなりに関与しまた余波を受ける」（167頁）時期である。櫛田は，1928年の3・15事件後の「存廃問題」で揺れる大原社会問題研究所で多忙を極めていた。一方，河上は「実践」により潜伏生活を余儀なくされ，櫛田宅に一時身を寄せたが，1933年1月に検挙された。

第11章「地代論争・小作料論争」は，農業部門を対象とする大論争を通して，櫛田の説を読み解く。地代論争では，マルクス批判派，とりわけ高田保馬批判に集中した櫛田に河上流の「実践」とは異なる政治的態度を見るが，櫛田の「差額地代論」には無理があった。続く小作料論争（封建論争）は，講座派と労農派の日本資本主義論争として知られるもので，マルクス派内部の論争により議論が深まるなか，『大原社会問題研究所雑誌』に発表された「わが国小作料の特質」（1931年6月号），「小作料の地代範疇について（小作農は農奴か）」（1933年7月号）が紹介される。講座派からの批判を一身に受けた櫛田の議論は，向坂逸郎へと引き継がれていく。

第12章「早逝と定まる『値打ち』」は，1934年11月5日に49歳で永眠した櫛田に対する追悼文で構成される。没後すぐ，『経済往来』『中央公論』『改造』『社会』の1934年12月号には，長谷川如是閑，草野心平，大内兵衛，権田保之助，森戸辰男が追悼文を寄せた。そして，まもなく『櫛田民蔵全集』全5巻が編まれた。獄中にあった河上は，1937年に出獄した後，櫛田フキから櫛田宛の河上書簡264通を預かり，それを整理して解説・注釈を付し，「櫛田民蔵君に送れる書簡についての思ひ出」としてまとめた。これはのちに大内兵衛によって『河上肇より櫛田民蔵への手紙』（1947年，鎌倉文庫）として刊行された。

以上，河上との師弟関係を軸に櫛田民蔵の生涯をとらえた本書は，「マルクス経済学の開拓者」としての櫛田に光を当てた。結局のところ，猪俣津南雄が『櫛田民蔵全集』の書評（「読書欄」『東京朝日新聞』1935年10月20日付）に書いた次の文章が，その人物評をよく示しているように思われる。

> 「学徒の研究的熱意と学問的良心とがジャーナリズムのために損はれやすいこと日本の如き国は多くないのだが，そのジャーナリズムと交渉を持ちながら，それの一切の悪影響から超然としてゐた櫛田氏であった。思ひつき程度のものを理論がましく書き立てたもの，セクト意識に根差した批判，論争のための論争，さうした低調な言説は，この全集のどこを探しても見当たらぬ。櫛田氏ほどよく論争した人も珍しいが，氏はそれを真理のための争ひとして一貫していた」（221頁，ただし誤植を修正）

もっとも，研究所の歴史を通してみた櫛田像とは異なる印象を受けたのも事実であり，大原社会問題研究所を「高野が創設した」（45頁）としているのは誤りである。法政大学大原社会問題研究所編『大原社会問題研究所100年史』（法政大学出版局，2020年）も合わせて読んでいただけるとより理解が深まるであろう。また，本書執筆に際して，「大原社会問題研究所には意外と見あたらなかった」（228頁）とされる一次資料に関しては，2012年に権田保之助資料が研究所に寄贈され，2022年度に公開された。ここにも櫛田と権田の書簡が多数あり，気の置けない友人間のやり取りが残されていることを付記しておきたい。

なお，大原社会問題研究所では，2022年度叢書『「論争」の文体――日本資本主義と統治装置』が日本資本主義論争をテーマとし，2023

年度叢書は無産政党の歴史を取り上げる。いずれも櫛田が生きた時代を現在から照射するものであり，研究が進んでいる。また，ドイツで文献収集にあたった櫛田が購入したマルクスのクーゲルマン宛献呈署名の入った『資本論』第1巻初版は，HOSEIミュージアムでレプリカが作成され，2023年秋から展示される。本書と合わせて，ぜひご覧いただきたい。

（石河康国著『櫛田民蔵――マルクス探求の生涯』社会評論社，2021年3月，252頁，定価2,500円＋税）

（えのき・かずえ　法政大学大原社会問題研究所教授）